

# 杓底の一残水

## 流れを汲む 千億の人

地球が誕生して四十数億年。この間、水は私達生きとし生けるものの生命を守り、育んできました。物が豊かに揃い、いつでも手に入る今日では、つい大切なものの恵のありがたさを忘れてしまい、粗末にしてしまいがちです。

永平寺の御開山 道元禪師は、朝の洗面の際に残した柄杓の底の水を「仏の御いのち」と思われ、大切に川にもどされたそうです。道元禪師が書かれた『典座教訓』という書物にも、「水は是れ身命なりと知る」と記されています。

このようにして大切にもどされた僅かな水によって、また誰かがその恵を得ることができるわけです。

一人が節約し、大切にする水は僅かなものかも知れませんが、その尊いまごころの集まりは、やがて大河となり大海に出て、雲となつて、再び谷川に新たな潤いをもたらすことでありますよう。

冒頭の句は、道元禪師の日常の心構えの真髓を、後の熊沢禪師が的確に偈に詠まれたものです。水に限らず、物事に対する私達の行ないすべてが仏作仏行（仏としての作法であり行ないであること）でなければならぬと、道元禪師は説かれました。

この心こそ、時代を超えて多くの人の心を潤し、その教えの清流を汲む何億もの人々に、正しい仏法と心の平安を与え続けてくれるに違いありません。

道元禪師の教えを広く知らしめるために、歴代の禪師により様々な偈（詩）が残されています。冒頭の偈は、熊沢泰禪禪師（一八七三〜一九六八）が作られたものです。現在、永平寺の正門の左右の石の門柱に刻まれています。

この偈は、道元禪師が柄杓の底に残った半杓の水さえも粗末にしなかった、という逸話に基づいたものです。この逸話は、ただ単に水を大切にしない、物を大切にしないというだけでなく、「作法」（日々の生活・行動）が全て仏法（仏の教え）であるということを示しています。

そして、その教えを慕って千億もの多くの人々が、永平寺を訪れ、門をくぐることを讃歎しているのです。

杓底の

一残水

流れを汲む

千億の人

曹洞宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部